

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

チョウキット銃乱射事件と 5・13 事件の亡霊

金子芳樹 (獨協大学外国語学部教授)

今年 3 月 30 日、1 人のマレーシア人の死を伝える記事が現地各紙に掲載された。その人物はプレベト・アダム (アダム二等兵) ことアダム・ジャアファル。34 年前の 1987 年 10 月 18 日にクアラルンプールのチョウキット地区で起きたライフル銃乱射事件の犯人である。

筆者は当時、この事件のニュースを留学先のマラヤ大学の学生寮のテレビで知った。キャスターの緊迫した声と画面に映し出された武装警官の姿に、思わず身構えたことを覚えている。このニュースはあの日、まさにマレーシア全土を震撼 (しんかん) させた。

この事件は陸軍レンジャー部隊のマレー人兵士が軍の装備品である M 16 ライフル銃を持ち出して起こしたものだ。前夜に発生した無差別乱射・殺害 (1 人死亡、2 人負傷)・立てこもりは、それだけでも人々を震え上がらせるに十分だったが、実は国民の多くがこのニュースに息をのみ、身構えたのはそれだけではない。

むしろ、その日に至る同国の政治・社会情勢が、事件の一報による衝撃を増幅させていた。多くのマレーシア人の脳裏に「5・13 事件」のイメージがよぎったからだ。

5・13 事件とは、1969 年 5 月 13 日に起きた「人種暴動」を指す。マレーシアは多民族が拮抗 (きっこう) しながら共存する社会にしては大きな民族暴動は少ない国だが、同年の暴動はクアラルンプールを中心に数百人の死者 (公式発表では 196 人) を出す歴史的な事件となった。

この暴動は 3 日前の総選挙で華人系野党が躍進し、選挙後の連立の組み合わせ次第では与野党が逆転しかねない状況下で、主にマレー人と華人の非難合戦と示威行動によって緊張が高まる中で起きた。路上の小競り合いから火が付いた暴徒の衝突や放火が最も激しかった地区の 1 つがチョウキットだった。

それから 18 年がたち、1987 年に同じチョウキットで銃乱射事件が起きた時、クアラルンプールは、この数日前から「5・13 事件以来最高レベル」といわれる民族対立の緊張のさなかにあった。その発端は、政府が中国語教育の廃止を狙っているのではないかと疑念だった。華人が敏感に反応するこの問題に華人社会が異例の結束を見せ、全国各地で数千人規模の抗議集会が開かれた。

それがマレー人社会の反発を買い、先兵とも言える

統一マレー国民組織 (UMNO) 青年部が乱射事件前日に 5,000 人規模の集会を開いて華人批判の氣勢を上げていた。民族対立のムードはいや応なく高まり、さらに 2 週間後に数万人規模で開催予定の UMNO の党大会に全国からマレー人党员が押し掛けて、首都が反華人一色に染まるといった風説が拍車を掛けた。事件はそんな張り詰めた空気の中で起こったのである。

乱射事件が報じられると、5・13 事件の再来をにおわすさまざまなうわさが飛び交い、事件はそれを狙ったものだとの話もまことしやかに流れた。テレビでは警察や政治家がうわさを信じないようにと繰り返し呼び掛けていたが、それがむしろ不安を誘う面もあった。

クアラルンプール市内には重武装の警官が配備され、平日にもかかわらず街全体が閑散として、華人商店を中心に多くの店舗がシャッターを閉めていた。高台に登ると、暴動の勃発を恐れて首都から脱出しようとしているのであろう、人や荷物を満載した自家用車の列が郊外に向けて長く伸びているのが見えた。

クアラルンプールの日本人会からは、車で外出する際には華人と間違われぬよう日の丸を掲げるようにとの注意喚起があった。民族や国籍を問わず、皆が緊張と恐れと祈りの中で過ごした 1 日だった。

警察の説得によって、その日の午後には犯人プレベト・アダムは投降し、その後、彼は民族対立とは全く無関係であり、犯行はアモック (精神錯乱症状) によるものだった、との公式発表があった。事態は各方面の取り組みの末、発火点に達することなく終息に向かったが、あの時の緊迫感は忘れがたい。

多様な文化が織り成すカラフルで刺激にあふれたこの国の日常が、実は危うい均衡の上に成り立っていることを思い起こさせる事件であった。

< 筆者紹介 >

静岡県生まれ。慶応義塾大学大学院法学研究科博士課程修了。法学博士。1980 年代末から約 3 年半、マラヤ大学に留学。著書に『マレーシアの政治とエスニシティ』(晃洋書房、2001 年)、編著書に『ASEAN を知るための 50 章』(明石書店、2015 年)、『「一帯一路」時代の ASEAN』(明石書店、2020 年) ほか。